

〈コラム3〉

名古屋城作事における飯米作料請取状

種田 祐司

慶長十五年（一六一〇）から始まる名古屋城普請に関する史料は、細川家など普請を担当した大名家に残っている。作事（建築工事）は幕府が直接作事奉行の中井大和守に命じており、中井家文書の中に名古屋城関係資料数十通が知られている。ただし、名古屋城作事の工程のなかで中井家文書が十分位置づけされているとはいがたい。ここに名古屋市博物館が所蔵する二通の飯米作料請取状を紹介し、名古屋城の作事の進め方について検討したい。

まず一通目（A）は慶長十六年十月十一日付で大鋸作右衛門が佐々長兵衛・勝野九郎兵衛・水野茂右衛門に宛てたもので、「大鋸・小引」（大工）のべ七百八十五人分の飯米作料を受け取っている。作右衛門は大和国斑鳩西里の大工と推測される。裏面には宛名の三名が人数に間違いないと記し署名している。第三章で堀内が紹介した「名古屋城石垣普請扶持米請取状」に文書の形式が非常に似ている。二通目（B）は同年同月二十五日付で、「かへぬり（壁塗）」（左官）源兵衛が市（野）辺甚右衛門に宛てたもので、壁塗のべ六百十四人分の飯米作料を受け取っている。裏書で市辺の家臣が人数を保証している点はAと同じである。またA・Bとも裏面には中井大和守の署名がある。このころ中井家が畿内の大工を支配しつつあつたことの証であろう。

Aの宛名の佐々と勝野は尾張藩郡奉行、水野は伝馬奉行、Bの市辺は国奉行原田藤右衛門の配下（それぞれ慶長十六年十月時点は不明）。さ

らにまたBの裏面には「平岩八郎兵衛・安井弥左衛門」の宛名があり、このうち安井は蔵奉行であつたようである。つまり尾張藩が飯米作料を支払つていると考えられる。この点も石垣普請の扶持米請取状と同じである。AとBの違いは、飯米作料はAが一日五升、Bが一日四升で、職種により差があることがわかる。

大工や左官が作業した場所はどこであろうか。大工は「御本丸北ノ御長屋」、左官は「御本丸東之ますかた御門脇御長屋」とあり、この「長屋」は多聞櫓のことと思われる。Aには長さ「弐拾七間」とあるが、名古屋城完成時の本丸北側の多聞櫓は、不明門から東北隅櫓まで四十間あり、長さが合わない。この点は最後にもう一度検討したい。

さて、二通の年が慶長十六年であることにはかかるに覚えた方は、相當に名古屋城通といえる。一般的には、慶長十五年中に普請が終了し、十七年から作事が始まつたといわれている。十七年に天守が、十九年に三之丸の堀や諸門が、二十年には本丸御殿が完成した。では、慶長十六年には何をやつていたのであろうか。現在知られているのは、以下のとおり。

一月 堀川掘削始まる（六月完成、慶長十五年説あり）

三月 家康、義直を伴い、現地を巡覧

五月 本丸・二之丸・西之丸・御深井丸・隅櫓・多門櫓の鍛冶入札

六月 普請のため美濃・伊勢衆参加

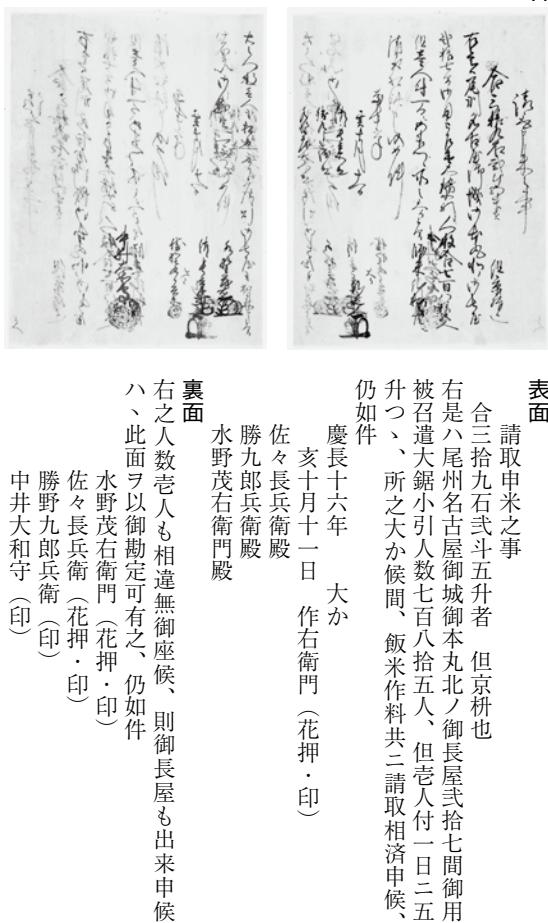
六月 清須城天守を解体、名古屋に運ぶ（現西北隅櫓か）

七月 穴太衆、小天守普請の扶持米申請

九月 普請奉行佐久間将監、指図を家康に送る

このうち、本資料に関係がありそうなのは五月の記事で、多聞櫓の建築が始まろうとしていたと考えることができる。もちろん他の建物は、

翌年から工事が始まつたのであらう。名古屋城の建築には当然大量の木材が必要である。とくに御殿などで使用する檜の大材は、当時ほとんど木曽地方でしか伐採できなかつた。しかし、前年の慶長十五年五月には木曽川が大水で名古屋への木材が多数流失した。同年十月には幕府代官大久保長安が、木曽代官の山村氏に伐採について指示を出している。そのような状況で、慶長十五年中に築城に必要な木材を確保できたとは思えない。これが慶長十六年から本格的に作事を開始できなかつた主な理由ではないか。そして、多聞櫓はそんなに大材を使わなくもないので、天守・本丸御殿等に先行してこの時点で確保した木材を使用して建築を開始したのではないだろうか。ただし、本丸北側四十間全部の多聞櫓を作ると、後日、不明門や東北隅櫓を建築する際じやまになるので、あとで二十七間分しか作らなかつた、と推察したのだが、いかがであろうか。



表面

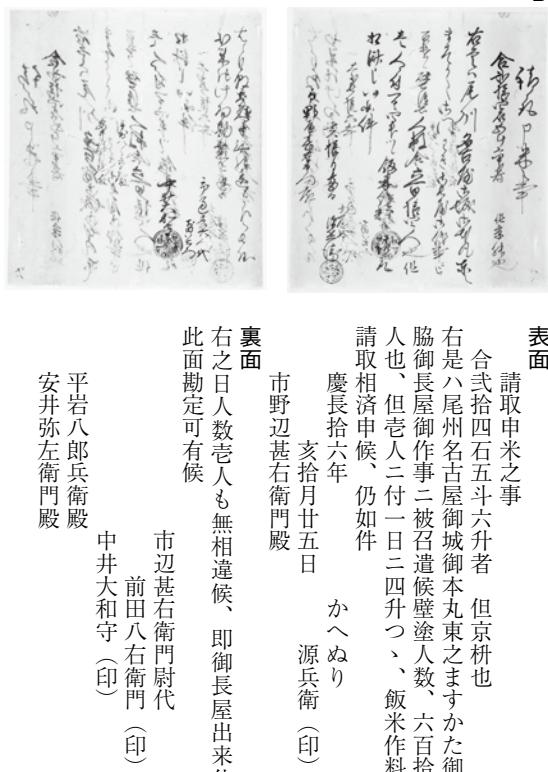
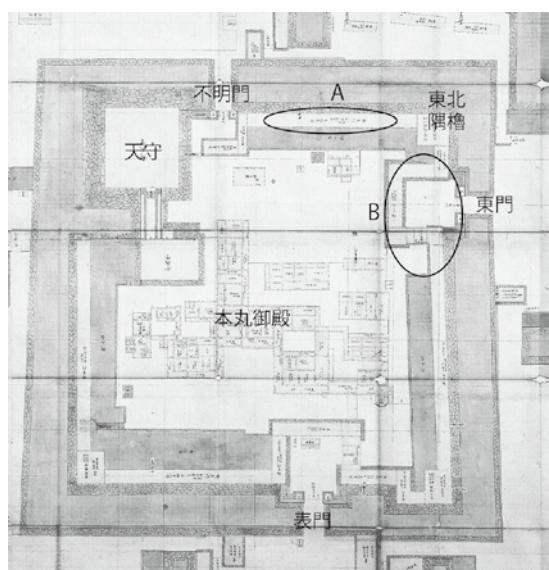
請取申米之事

合三拾九石貳斗五升者 但京耕也

右是八尾州名古屋御城御本丸北ノ御長屋貳拾七間御用
被召遣大鋸小引人數七百八拾五人、但壹人付一日二五
升つ、所之大か候間、飯米作料共ニ請取相済申候、
仍如件

慶長十六年 大か
亥十月十一日 作右衛門 (花押・印)

B



※ A、B はいずれも名古屋市博物館蔵